

精神障害者自身のストレングス活用にむけた協働的かつ継続的なアセスメント展開 —ソーシャルワーカーへのヒアリング調査から—

○ 京都府立大学大学院 氏名 山東 綾乃 (8524)

キーワード：精神障害者、ストレングス、アセスメント

1. 研究目的

日本の精神障害者支援では、「入院医療中心から地域生活中心へ」という流れの中で、とくに近年、地域移行・定着にかかわる法制度や施策の整備が行われてきた。その中でもストレングスの概念は、支援に重要な視点として注目されている。しかしながら現状では、精神障害者の地域生活定着に必要なストレングスの具体的な中身や、活用による効果が十分明らかにされているといえない。こうした背景から、昨年度の学会では、「精神障害者の地域生活定着に固有なストレングス要素の研究」として、先行研究の整理と現場の支援者へのヒアリングから、地域生活定着支援にかかわる支援者が共通に理解し活用できるストレングス要素の項目や内容を明らかにしてきた。しかしその一方でストレングスは、①支援者の意識的なストレングス情報の把握、②利用者自身によるストレングス情報の認識・評価、③①と②を利用者の生活に反映させる継続的な支援展開、がなければ効果的に機能していかないことも理解できた。

そこで今回の報告では、昨年度の報告をふまえ、先行研究とヒアリング調査から、利用者自身のストレングス活用を効果的かつスムーズにする地域生活定着支援固有の方法を、アセスメントを糸口に検討してみたいと考えている。なぜなら、①～③の課題は、ストレングス情報を包括的にキャッチし、利用者にフィードバックしていく支援の方法や過程と大きく関係しているからである。ゆえに、情報収集や状況理解の局面として周知されているアセスメントを発展させた新たな支援方法の構築が有効な解決方策となると考えた。

2. 研究の視点および方法

今回の研究では、昨年度明らかにした地域生活定着支援の課題をふまえ、まず日本や諸外国のアセスメントに関する先行研究から、①利用者の自己アセスメントを取り入れた協働的なアセスメント、②支援過程全体で展開する継続的なアセスメント、の方法を検討した。とくにここでは、協働的なアセスメントの協働の意味や、プランニングやインターベンション、モニタリングといった他局面とアセスメントとの関係を整理した。

次に、協働的かつ継続的なアセスメントの効果を検証するため、現場のソーシャルワーカーへのヒアリング調査を実施した。具体的には、これまで整理してきたアセスメントの実施状況や、利用者の包括的なストレングス活用と地域生活定着へ与える影響について聞き取りを行った。またヒアリングは、先駆的な事業を行う北海道、埼玉県、鹿児島県の3事業所にて、社会福祉士か精神保健福祉士の資格をもつ6名の支援者を対象に実施した。

3. 倫理的配慮

本研究は、社会福祉学会の「研究倫理指針」等を参考に、配慮を行っている。とくにヒアリング調査では、調査対象者に研究の目的や方法、成果の公表方法、個人情報保護等の倫理的配慮、調査対象者の権利に関して文章で示し、同意書を取り交わした上で実施した。また得られたデータ等の管理を徹底し、それらを取り扱う際には細心の注意を払った。

4. 研究結果

まず理論研究では、地域生活定着やストレス活用との関係から、本研究で重要となる協働的あるいは継続的なアセスメントの意味や方法を検討した。

①協働的アセスメントにおける協働関係の明確化—ストレスの情報や活用状況に対する利用者自身の理解や評価、分析、判断を取り入れるなど、アセスメントの中で利用者と支援者が共に役割や機能を果たす関係

②継続的アセスメントにおける展開方法の具体化—プランニングやインターベンション、モニタリングといった支援展開全体と結びつく循環的な情報収集・評価

そして、この先行研究を軸に支援者を中心としたヒアリング調査を行った結果は、次のとおりである。(なお、詳細は当日の資料で示す予定。)

- (1) 協働的アセスメントによる支援者への影響（利用者中心の支援展開、利用者理解の促進など）と利用者への効果（利用者の役割意識、肯定的な自己評価の促進など）
- (2) アセスメントの循環的展開による効果—あらゆる局面や状況においてその時の本人の強みや長所の活用を中心課題として計画・実践・評価できる支援展開の実現

5. 考察

今回の研究では、先行研究とヒアリング調査の結果から、精神障害者自身がストレスを活用するために、協働的かつ継続的なアセスメント展開を意識していくことが不可欠であると理解できた。そのため、その意味や方法、支援過程における位置についても明らかにしてきた。さらに、支援の中で特徴的なアセスメントを行うことによって、利用者と支援者は、利用者のストレスやニーズを共通認識できることが理解できた。また、特徴的なアセスメントを軸にした支援展開は、寛解や悪化を繰り返す精神障害の特性により生活の変化しやすい利用者のニーズや変化をキャッチしやすいため、彼らの地域生活をより主体的に継続させる効果があることを示唆できた。

しかし一方で、ヒアリング調査からは今後の課題も明らかになった。とくに支援者が意識してストレス要素を発見し、その情報を利用者システムと共有しながら、利用者本人の活用を継続して支援するという一連の展開には、次の2点の課題が指摘できた。

(1) 協働的なアセスメントの実践にかかる課題

—当事者、支援者がストレス情報を相互理解するためのツール開発の必要性

(2) 支援過程全体にわたるアセスメントの展開にかかる課題

—プランニング、インターベンション、モニタリングなど、それぞれの局面の特性に沿ったアセスメント方法の必要性